



Vol.14

発行 2015年8月

動物愛護ボランティア

《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

：携 帯 090-2241-1860

生き物の命に関わること

岡田 英二

私は、今から20年程前に農林水産省に配属され、研修の時に当時の宮沢総理大臣に講話を受けたのを覚えています。つくばの蚕糸・昆虫農業技術研究所に研修で半年勤務となり、その後、松本支所に転勤してきたことで、松本を知ることになりました。

学生の時に実験用の昆虫（害虫）を飼っていましたが、仕事に就いてから生産に関わるカイコを相手に働くということが、こんなにも大変だとは想像していませんでした。生き物ですから、土曜・日曜も無く世話をしなければなりません。そして、そのカイコを実験に使うとなれば、研究目的に合わせて餌を調整して与え、排泄物を片付け、温度や湿度を管理し、細菌やウイルスに汚染されないよう気遣い、環境影響にも配慮して飼育します。必要に応じた齢で実験に貢献してもらうことになりますから、たかが小さな昆虫でも、大切なパートナーとも言えるのです。これらのカイコは私が制御して、卵から幼虫にし、5回脱皮した幼虫は蛹になって、最終ステージで蛾になります。蛾を交配させることが、品種育成や改良の主要な方法で、命を繋ぐ大切な過程です。羽化した蛾を、目的に応じて品種を交配させると、1日後に300～600個の産卵をします。この新たな卵から孵ったカイコを試験して、目的に合ったカイコを選んでいきます。こうして何度も、新しい命は人間に貢献してくれます。このことは、私に、命に向き合う事の大切さを教えてくれています。

「小石丸」という日本で育成された品種があります。繭は小粒ですが、白さが際立つ綺麗な糸を吐く優秀なカイコです。毎年、皇室から卵を預かり、翌年の春に皇居内の御用蚕所で皇后陛下が大切に育てられています。皇室では、国民と苦楽を共にする想いから伝統として、古くから人々が営んできた農事の中で、天皇陛下が稲作をなされ、皇后陛下は養

蚕に携わっております。そのカイコの繭から繰り出した糸で織られた反物を、自らがお召しになったり、国賓などの大切な方へ贈られておられます。私は、この仕事に就くことで、カイコの飼育が皇室でも大事に継承されていて、養蚕が国に富をもたらす物として、大切に扱われてきたことを知りました。日本のカイコの育種技術は世界でトップです。今まで自然界では想像できなかった、一年中、何度でもカイコを誕生させて飼育が可能です。しかし、仕事の上では大切な仲間のような存在であっても、いつでも会えるから愛着が無いのかもしれませんが。命を繋いできているという意識はとても薄いものです。

ところが、17年前の猫との出会いは衝撃的としか言いようがありませんでした。犬に追われた猫が、助けを求めて、いきなり私の肩に登りました。それから一緒に暮らし、年老いて、2年前に、ついに私の前から居なくなりました。あの猫は、一生に一度だけの出会いでしたからこそ、大切に思えたのかもしれませんが。どの命も同じだと思いますが、関わる深さ、苦勞、感動などで、人それぞれの価値観が変わり、その違いが、命の重さを左右することが解ります。経験値の違いで、想いは大きく異なるのは仕方ないでしょう。あの猫が死んでしまったことで、もっと、命の大切さに気付かされました。

何かを犠牲にして何かが生まれる。これは、生きていることの証でしょう。この体験は、多くの子供たちに解いて聞かせ、体験させる機会もたびたび持つようにして、命へ向き合う事の意味と想いを伝えるようにしています。先日も岡谷で、カイコの解剖を行い、命を知る授業を行ってきました。

最後に、皇太子ご夫妻が、皇居内に迷ってきた犬を保護し、大切に飼われていることを知り、皇室では命と真摯に向き合い、大切に育てる教えが脈々と続いていることを知りました。とても誠実できめ細やかな想いを感じ、日本人として感激しました。